

1 『このついで』試論——第二話の読解を手がかりとして—— 7

2 『このついで』篇名由来考 33

3 観音靈験譚としての『貝あはせ』——観音の化身、そして亡き母となった男—— 59

4 『ほどほどの懸想』試論——頭中将は後悔したか—— 99

5 幻惑装置としての現存本文——『逢坂越えぬ権中納言』復元—— 135

6 『思はぬ方にとまりする少将』ところどころ 161

7 『はなだの女御』の〈跋文〉を考える——『堤中納言物語』の本文批判と解釈—— 185

8 『堤中納言物語』書名試論 209

本書は、『堤中納言物語』に関する既発表論文七本に、未発表の論稿一本を加えて編んだごく小さな論文集である。各論各様だけれども、本文批判の徹底と厳密な本文解釈を最優先課題とする強固な意識が⑧を除く全体の基調となっている。以下に所収八編の概要その他を記す。

*

①は、『このついで』作中三話のうちの第二話を、「愛児喪失の悲しみに沈む女の物語」と読み改めることで、三つの話に「恋愛と子供の誕生、そして破局の予感→愛児の死と絶望→苦悩の果ての出家」という有機的な流れが生まれ、ある王朝女性がたどった哀切な生の軌跡を語り継ぐ意図が認められるようになることを述べた論で、あわせて、篇名の意味を「子のついで」すなわち「子を契機として展開する物語」と解いたもの。初出後、本論に対する反論ないし異論として、下鳥朝代「このついで」論——「巡る」物語——〔国語国文研究〕第九十九号、平七・三）や、金井利浩「それでも三話は〈並立〉する——「このついで」私見——」〔中央大学国文〕第四十六号、平一五・三）が出ている。併読いただければと思う。なお、論中では触れていない事柄だが、『このついで』の「中宮」を帝寵の薄い后と読む従来の風潮は、山上義実「堤中納言

物語』「このついで」試論——「帝寵薄き后」という解釈をめぐって——」（金城学院大学論集・国文学編）第三十六号、平六・三三）が説くとおり、まったくの誤り。この「中宮」は帝に深く愛されている幸せこの上ない人物であって、だからこそ、予定された帝の訪れまでのつれづれを、女房たちが薄幸な女性の物語を披露することで慰めているのである。そもそも、帝寵の薄れた主人の御前で仕えている者たちが出家に至る不幸な女性の話をするはずがない。常識で考えればすぐにわかることだ。

2は、『このついで』という篇名の由来に新見を提示した論で、作中「あいなきこと」のついでをも聞えさせてけるかな」とある箇所傍線部「こと」は誤写による転化本文であり、原形を「このついで」と考えてタイトルの原拠と推断した。そのうえで、「こ」は「籠」と「子」の両義性を有することを主張したものの。1の延長線上にある論文といえようか。

3は、藏人少将が観音になりすまして詠んだ「かひなし」と歌、とりわけ第三句中の「白波」の語に関する多角的考究を柱にして、観音靈験譚の視点から独自の『貝あはせ』論を展開したもの。色好みの貴公子が、「観音の化身へ、そしてついに」、子供「たちを見護る亡き母」の視線そのものへと変容し「ていく過程を、丁寧かつ論理的に跡づけたつもりだが、はたしてその首尾やいかに。

4は、『ほどほどの懸想』の末尾一文にきわめて重大な誤写があることを指摘してこれを正し、その「復元」本文をもとに真の作品像を提示するとともに、「いひよる」「いひつく」「あふ」という恋愛の三段階が截然と描き分けられている一篇の構造をも明らかにした論。すなわち、現本文「「いかでいひつきし」などおぼしけるとかや」は、「いかでいひつきしが」などおぼしけるとかや」または「「いかでいひつきて」などおぼしけるとかや」からの転化形であること、ゆえに、頭中将の式部卿宮の姫君との交際に対する後悔・反省の念をここに読み取る従来の解釈はとんでもない間違いであって、彼がこれから姫君に「いひつく」ことを願望・期待する表現と捉えなければならないこと、その結果、この物語のありさまが大きく変貌すること等を明確にしたわけである。なお、本論の論旨を補強する意味から、その後発表した別稿（関連論文5）の一部を【補論】として付け加えた。めったにないことだが、ここで提起した自説の正当性には百パーセントの自信がある。現本文と通行の読解にただ漫然と従った論文にはもう用はないと思う。

5は、『逢坂越えぬ権中納言』の歌合場面の大胆な本文「復元」と謎の登場人物「右の少将」の存在を否定した論。われながら無謀な「手術」を執行したものだと感じているけれども、この作品に関する研究の現況を顧慮するならば、こうした過激な提案にも起爆剤としての意義はあるだろう。あとは後世の議論に俟つのみ。

6は、『思はぬ方にとまりする少将』を対象にして、現存本文の改訂または現行の解釈に修

正が必要な箇所を七つほど取り上げ、それぞれに卑見を提示したものだ。どちらかといえば「関連論文」の方に入れるべき性質の論だが、『堤中納言物語』の注釈水準を知っていたく格好の見本になると考えて本書に収めた。第五節・第七節で扱った問題点をどのように処理するかは、この物語を正しく読むうえで特に重要といえるだろう。

7は、難解な作品『はなだの女御』の〈跋文〉を三部に分けて読み解く試みで、本文改訂等の基礎的作業を交えつつ、「第一部をこの物語の語り手、第二部を「すき者」、第三部を物語本体に登場し「すき者」に垣間見された女性たちのうちの一人によって書き記されたものとみ、そうした設定の裏には、語り手と登場人物かつ視点人物たる「すき者」による共謀の構図をまぜず浮上させ、加えて、語られた側の女性の「証言」により一篇の事実性をより強固に保証する仕組みを築き上げる、という強かなもくろみがあったのではないかと考え」てみた。

8は、『堤中納言』または『堤中納言物語』という書名の謎に関して一案を披露したもので、「堤中納」は「裏ノ中ニ納ム」ないし「裏ノ中ニ納ル」、「言」は「ト」イフ〇〇」または「モノガタリ」と読め、十の短篇物語と一つの断章が納められた裏の発見者が、藤原兼輔の通称と掛ける「ことば遊び」として命名した経緯を想定した。何やら怪しげな判じ物に挑む趣だが、「枯木ならぬ仮説も山のにぎわい」程度の意義はあろう。

*

井上新子氏の待望の大著『堤中納言物語の言語空間 織りなされる言葉と時代』（翰林書房、平二八・五）がついに刊行された。趣向と完結が命の短篇物語集『堤中納言物語』の研究も、いよいよ新しい局面を迎えたとの感を深くしている。この機に乗じて、本書もまた「ささやかな」貢献ができれば幸いである。

なお、各論文間の表記の統一については極力努めたが、様式や論調の調整はほとんど行っていない。私の悪癖である引用過多、お行儀の悪さもそのままにした。諸賢にはどうかご海容を賜りたい。